

【特徴】

厚生労働省認可の救命救急センターとして、原則として24時間365日、乳児から成人までの重症患者の受け入れを行っている。また、当センターは地域医療機関での入院症例の病態悪化症例、または受け入れが困難な症例にも対応し、地域の「集中治療室」の機能も果たしている。2013年から、内科的な診断、初期治療を主な業務とする初期急病診療部が創設され、救命救急部との二本立てで構成されている。これにより後期臨床研修医3年間の間に、新専門医制度での救急専門医もしくは総合診療専門医のいずれかを取得できるプログラムを準備している。

2014年度は重症例1,179例、中等症例3,326例の症例に対応している。症例の内訳は概算で内科疾患が60%、外傷が25%、熱傷、中毒及び窒息など非外傷例5%、脳外科的疾患、循環器的疾患5%、心停止5%と全国の救命救急センター同様内科疾患が多くを占める。

近年の傾向としては地域医療機関からの肺炎、敗血症など内科疾患の搬送症例が増加していること、外傷整形手術件数が500例、その中では、骨盤骨折、多発肋骨骨折の症例に対応していることがあげられる。

小児救急においては、小児救急科との円滑な連携により、大阪府の小児重篤症例受け入れ病院の拠点病院として府内をはじめ近隣府県からの小児重症救急症例の受け入れを行っている。集中治療管理が必要な重症例が90例と小児の救命救急センターとしての役割も果たしている。

本年度内に大阪市消防局と連携し、ステーションを設置する計画である。これにより病院前救護の研修が充実し、重篤患者の積極的受け入れがさらに活発になることが予想される。

大規模災害時には大阪府の災害拠点病院として被災傷病者の受け入れを積極的に行う体制および災害時に医療支援チーム（DMAT）として出動できる体制を整備している。

日本救急医学会指導医指定施設、専門医指定施設、日本集中治療医学会専門医研修施設である。

【研修目標】

1. 一般目標

(1) 自立した救急医を目標とする。

当センター救命救急センターでは、成人・小児、外科系・内科系を問わずに救急症例を多数経験できる。この環境の中で、救急症例を診断し、基本的手技、治療方針について自己の意見がもてる救急医の技量を身につける。

(2) 救急医としてのサブスペシャリティを会得する。

院内の各科の協力を得て、サブスペシャリティとしての技量を習得するとともに、各種専門医を取得するための要件を満たす。

2. 行動目標

最低限の目標として日本救急医学会専門医取得のための実技を実施かつ指導できることを目標とする。

(1) 心肺蘇生法（成人二次救命処置ACLS、小児二次救命処置PALSなど）の実施と指導ができる。

(2) 外傷初期診療（JATECなど）の実施と指導ができる。

(3) 疾病、外傷を問わず的確な重症度の判断ができ、患者状態の安定化を行うための手技の実施と指導ができる。

(4) 重症の救急症例に対し、集中治療が実施できる。

● 人工呼吸管理が実施できる。

● 輸液管理ができる。

● 血液浄化法が実施できる。

すなわち、重症例に対し生体恒常性を回復するための治療を実践できる。

【方略】

- (1) 防ぎえる死（preventable death）を回避するための適切な、患者評価、治療手段、治療順位を学習する。
- (2) 重症例に対する治療目標に向かったの集学的治療を、上級医の指導のもとに実践する。
- (3) 積極的に担当医となり、上級医の指導のもとに患者の治療方針の決定、家族への対応などを実践する。
- (4) 救急コースとしてのJATEC、BLS、ACLS、PALSなど、集中治療コースとしてのFCCS、災害医療コースとしてのDMATなど、救急医療に必要な各種標準コース課程を受講する。
- (5) サブスペシャリティを持った救急医を目指して院内各科（各科内科、各科外科、小児科、集中治療部、麻酔科など）に協力を求め、各自の興味や特性に応じて救急以外の科目についての研修を行う。
- (6) 年間2回以上の学会発表、1編以上の論文を執筆する。
- (7) 救急専門医を取得する。

【評価】

上記の行動目標について自己評価を行い、かつ指導者から評価を受ける。

【研修プログラム】

研修3年間のうちに、救命救急センターでの活動に加え、救急に関連するサブスペシャリティを各自が持つことを研修プログラムの大きな目的としている。

1年目（卒後6年目）	2年目（卒後7年目）	3年目（卒後8年目）
救命救急センター初療・集中治療室で初期臨床研修医、レジデントに対して指導的な役割活動と主治医としての責務を行う。	救急医として各自の興味や特性に応じた科（各科内科、各科外科、小児科、集中治療部、麻酔科など）を研修し、サブスペシャリティを会得すると共に、各種専門医を取得するための要件、技量を身につける。3年目にもこのプログラムが引き継がれることがある。	サブスペシャリティを会得した救急医として、その分野での実質的なリーダー的役割活動と学術活動を行う。

【見学等問い合わせ先】

救命救急センター部長 林下 浩士
救命救急部長 宮市 功典